

【話 題】シリーズ

新シリーズ「各都道府県の林業・林産業と遺伝育種の関わり」開始にあたって

来田 和人^{1,*}

森林遺伝育種4号4巻より新シリーズ「各都道府県の林業・林産業と遺伝育種の関わり」の連載が開始される。連載の開始にあたり、本企画の目的を説明する。

平成26年度「森林・林業白書」(平成27年5月29日公表)60ページに掲載されたコラム「林木育種の歴史」には、「国として林木育種事業を始めたのは約60年前で、戦後復興の中で木材需要の急増に対処するため、森林資源の充実が強く要請されたことを背景に、・・・(中略)・・・成長等の形質が良い木(精英樹)の選抜を全国規模で行い、昭和32(1957)年以降、これらの精英樹の採種園等を造成して、苗木の生産・普及を行ってきた。また、林木育種事業では、その後も時代の要請に応じて、新たな品種の開発を進めてきた。」とある。「戦後復興」という時代の要請を受けて植栽された森林は、いまや主伐期に入り次世代の森林を造成する新たな時代に入ろうとしている。新シリーズ「各都道府県の林業・林産業と遺伝育種の関わり」では、林木育種の現場を担っている都道府県の方々にそれぞれの都道府県の森林・林産業の状況と次世代の森林を見据えた「時代の要請」を紹介していただき、森林遺伝育種研究や林木育種事業に携わっている者が現在の「時代の要請」を互いに共有することにシリーズの目的がある。

林木育種事業では、これまで成長の早い精英樹の選抜のほか、剛性が高いスギやねじれの少ないカラマツ等の材質が改良された品種、寒風害や雪害等の気象害に強い品種、幹重量が大きく二酸化炭素吸収能力が高い品種、スギカミキリ等の病虫害に強い品種、松くい虫による松枯れ被害に強い品種、花粉の少ないスギ、ヒノキの品種など、様々な品種が開発されてきた。また、最近では成長等がより優れた第二世代精英樹(エリートツリー)の開発や特定母樹の選抜が行われている。これら取り組みは、森林総合研究所が中心となって行われ、日本の森林遺伝育種研究の発展や優良種苗

の普及に大きく寄与してきた。しかし、大きな社会の流れを受けて生まれてきた研究の成果をいざ現場で使おうとしても、都道府県が抱える林業・林産業の問題や種苗生産の体制は様々であり、多くの障害がある。例えば、私が林木育種に関わっている北海道では、植栽苗木の多くはカラマツ、トドマツ、アカエゾマツの3種であるが、これら3種の着花促進技術が確立されていない。このため、特定母樹を選抜しても、挿し木で苗木を生産しているグイマツ×カラマツ雑種の優良家系「クリーンラーチ」以外は、実効性のある種苗生産計画を立てることが難しいという問題を抱えている。

そのため、新シリーズでは、執筆者の方に次の3つの内容を原稿に含めて頂けるようお願いしている。

- 1) 各都道府県の林業・林産業の現状と問題点について
 - 2) 各都道府県の林木育種事業と関連研究の動向について
 - 3) 問題解決に向けて期待する今後の森林遺伝育種の研究や事業について
- 1) でそれぞれの都道府県の林業・林産業の現状と問題点、言いかえると林木育種の必要性、目的から書き起し、2) でそれらの問題に対してどのような林木育種事業、森林遺伝育種関連研究に取り組んでいるのか、そして、それらの取り組みの中でどのような問題が残りに、どのような新たな問題が発生したのか説明し、3) では、2) で指摘した問題に対して今後、森林遺伝育種研究や林木育種事業で何をなすべきかを提案するという構成である。林木育種担当者が行政と研究の間を異動する都道府県がある中で、今後の研究提案まで記載頂くのは、ハードルの高い執筆依頼かとも考えたが、研究サイドと種苗生産・造林現場のミスマッチをなくし、研究成果が速やかに活用されることを願って新シリーズを企画した。3) の「提案内容」がイコー

* E-mail: kita-kazuhito@hro.or.jp

¹ きたかずひと 北海道立総合研究機構林業試験場

ル「大学や森林総合研究所への研究要望」であり、今後の研究計画の立案に役立てて頂けると、本シリーズの目的は達成である。

本シリーズは、「森林遺伝育種」編集委員から都道府県の林木育種担当者に執筆を依頼して、各号1～2

本のペースで2年間に渡り掲載する予定であるが、投稿も歓迎する。投稿される方は、原稿の種類を「話題」として「投稿規定」と「執筆要領」に準じて執筆ください。